

海上の要地なり 7、樺太にあり、樺太庁所在地 8、福岡県にあり、製鉄所あり

#### ◆解説

かつての地理教育では地誌が重視されていました。「どこにどんな都市があり、どんな河川が流れているか」といった知識を教え込むことが重要であり、特に戦前はその傾向が強かったようです。また、時事的・国策推進的な側面もあり、出題される地名には時代的な背景があったと思われる。

「2 雲山(現在の北朝鮮)」「7 豊原(現在のサハリン)」はいずれも、当時日本統治下にあり、「日本」の一部として当然知っておくべき知識とみなされていたのでしょう。「3 萍郷(ひょうぎょう)」は、中国江西省の重工業都市で石炭産地として知られています。大正10年(1921)は、日本の中国進出が本格化していく時期で、この炭坑にも日本資本が関与していこうとしていたようです。「5 サントス」は一般的な出題とも考えられますが、明治40年(1907)ころから始まっていた日本からのブラジル移民の多くが、コーヒー農園で働いたこととの関連も推察されます。また、「6 二見港」は現在ではほとんど取り上げられませんが、第一次世界大戦の結果、旧ドイツ領であった南洋諸島(マリアナ諸島など)が日本の委任統治領となりました(この後、サイパン島などに多数の日本人が移民・出稼ぎとして渡っていくことになる)。そのため小笠原諸島が航海上の要地として注目されるようになったことが、出題の背景として考えられます。

### 昭和20年 筆問筆答(岡山一中)

#### ◆筆問筆答問題(抄)

三、太郎は国民学校の初等科六年生で、家族は父母と初等科一年生の弟と五歳になる妹の五人であるが父は出征してゐる、ある夜母は二町程離れた隣組長さんの家で開か

れる常会に出席し、弟と妹は火鉢のそばで絵本を見て居り太郎は戦地の父に手紙を書いてゐた。すると突然空襲警報が発令された。

- 1、あなたが太郎であつたら、その時どうしますか、する順に書きなさい。
- 2、それからラジオが次のやうに知らせた。

「十九時二十六分(午後七時二十六分)二十二機より成る敵の第二の編隊が室戸崎の南方約四十軒上空を北進中」室戸崎・岡山間の距離は百六十軒で、敵機の時速が五百軒とすれば此の編隊が岡山の上空に達するのはおよそ何時何分頃ですか(室戸崎は岡山のほぼ南にある)

#### ◆解答例『合同新聞』掲載(要約)

- 1、燈火管制をして、防空服装に身ごしらえ、火鉢の始末などをする、母が帰らぬうちに待避命令が出たら弟妹を連れて行動するが、そうでない場合は母の帰りを待つ
- 2、 $160\text{軒} + 40\text{軒} = 200\text{軒}$   
 $200\text{軒} \div 500\text{軒} = 0.4\text{時間} = 24\text{分}$   
 $19\text{時}26\text{分} + 24\text{分} = \underline{19\text{時}50\text{分}}$

#### ◆解説と当時の入試制度

昭和20年(1945)の入試は前年から開始された学区制、総合考査制のもとで実施されました。総合考査制とは戦後の「総合選抜制度」に相当します。岡山市内の中学校では岡山一中と岡山二中とが協同で考査や選抜を実施、この年は受験番号が奇数か偶数かで、受験生は日によって一中と二中の会場を入れ替わって受験しました。戦後の総合選抜制度と異なるのは、予め合格者として総計に相当する数を選抜し、その後各校に配分されたこと、通学距離の近さがより優先されたことなどでしょうか。当時は内申、人物考査、身体検査の3つが判定材料でしたが、受験競争緩和のため、人物考査は昭和15年(1940)から口問口答のみになっていました。しかし、この年から空襲対策として人物考査に筆問筆答が復活、考査実施中の警報発令に

備えて、予備問題は2種類も準備されました。残された実施要項には「空襲警報発令ノ時 待避壕へ」のメモ書きも見られます。



『校史資料編1』のカバー

「筆問筆答」問題とは今日いう「総合問題」です。『合同新聞』は「実践平易な問題を取上げているがとくに今回の戦局に相応しい空襲に対する心構、動作につき筆答させているところに決戦考査の特色をよく現している」と評価し、深柢小学校校長は「時局に根ざした常識であり、子供らの生活を中心とした問題であつた、やさしいようでチョコチョコ骨があつたが、全体を通じ穏当である」と評しています。

爆撃コースが単純化されていることや、速度が速すぎるなど事実と反する点もありますが、夜間空襲を想定していること、南方から爆撃機が侵入してくること(B29の基地はサイパン島などにある)など事実と即した出題であることには違いありません。この年度の入試は3月16日から3日間をかけて実施されましたが、その直前の3月10日、東京は大空襲で壊滅的打撃を受け、約10万人以上の方々が亡くなったといわれています。空襲は、子どもたちにとっても、入試を実施する側の学校にとっても切実な問題でした。3カ月後、空襲は現実のものとなります。岡山一中も、岡山二女も灰燼に帰し、空襲警報の遅れもあって、地方都市でありながらおよそ2,000人もの人命が失われました。空襲に怯えながら受験勉強に励み、空襲に関する問題を解いた国民学校生(当時、小学校は国民学校と呼ばれていた)の気持ちに思いをはせながら、入試問題を考えてみるのも、戦後70年を考える上で意義深いのではないのでしょうか。